



国際航路会議と国際交流

CVV 村上 正

1、国際航路会議とは

第27回国際航路会議が平成2年(1990年)5月20日から7日間大阪で開催されました。丁度その時、国際花と緑の博覧会が大阪の鶴見緑地で開催されていました。

国際航路会議は国際航路会議協会(PIANC)が開催するもので、100余年の歴史がありますが、アジアで開催するのは初めてであり、しかもそれを日本の大阪で開催されました。この会議は港湾、漁港、航路及び沿岸域に関する技術の向上を図るために世界各国の関係者を招待して、それに関する各種技術会議、分科会、国際航路会議記念展、技術視察を行うものであります。特にこの大阪大会では、ジャパン・テクニカル・セッションが開かれ、日本の港湾技術の進歩を世界に知ってもらう機会が設けられました。この大会には47カ国5国際機関から1,139名(海外623名、国内516名)の参加があり、活発な意見交換により国際的な技術交流が深められたばかりでなく、それと平行して行はれたれた同伴者プログラムなどを通じて参加各国の相互理解を向上し、国際協力を推進する上からも意義あるものでした。



写真-1 第27回国際航路会議のポスター

2、組織委員会

組織委員会の名誉総裁に皇太子殿下をお願いしました。

国際航路会議執行委員会は

- ・会長 Robert de PAEPE 氏（ベルギー人、公共事業省官房長）
- ・副会長 5名（日本人1名を含む）
- ・事務局長 ベルギー人

日本国内組織委員会は

- ・名誉会長 運輸大臣（組織委員会が設置されてから大会まで4名の大臣が代られました。初代橋本竜太郎氏、大会実施時大野 明氏）
- ・名誉副会長 農林水産政務次官
- ・名誉顧問 大阪市長
- ・会長 運輸省港湾局長 当初藤野慎吾氏、実施時御巫(みかなぎ) 清泰氏
- ・副会長 2名
- ・委員 16名
- ・事務局長 当初村上 正、実施時佐藤 寛氏

日本国内組織委員会設立時、昭和 61 年(1986 年)10 月には事務局長に私が就任し、平成元年(1990 年)4 月から後輩の佐藤 寛氏が引継ぎました。



写真一 2 開会式 名誉総裁皇太子殿下の開会のおことば

3、特別講演

第27回国際航路会議では皇太子殿下が特別講演をなされた。

殿下は、長らく水上交通について御研究されており、学習院大学にご在学中は日本の中世の海上交通について御研究なされ、英国オックスフォード大学に御留学された時には「18世紀におけるテムズ川の水上交通」について御研究されました。今回の御講演は「交通路としてのテムズ川」と題して、御研究の一端をお話になりました。

ここまで来るには事務局としては非常な苦勞をし、宮内庁当局は名誉総裁は公務として宮内庁がお受けしましたが、御講演は殿下ご自身がお受けになることだから宮内庁は関与できないとの事であると言われて、そのあとは侍従を通じてのみ殿下にお願いいたしました。また事務局員の一人が、オックスフォードプレスに殿下の論文が英文で載っていたのを発見し、粘り強くお願いしたのが功を奏したと思っています。



写真一3 皇太子殿下の特別講演

4、ベルギー・ブッラセルの国際航路会議協会本部

この国際航路会議は1885年第1回国際内陸航路会議としてベルギーにおいて開催され、その後外洋航路に関しても討議されるようになり、1902年第9回会議において、「国際航路会議協会」が設立され、協会本部はベルギー王国ブッラセルに置かれることになりました。二度の世界大戦による長期間の空白を乗り越

え、1985年に開催された第26回会議で100年の節目を迎えました。ベルギー王国はヨーロッパ北西部に位置する立憲王国ですが、面積約3万平方キロ（日本の九州の約7割）、人口986万人（1980年）の小国。その首都がブラッセル（フランス語ではブリュッセル）で人口約102万人。市街は美しく「小パリ」の名があり、街の中央部を貫く大通りの終端部にはパリにあるような凱旋門があります。この街にはEUの本部やNATOの本部があり、そして世界的な国際機関の本部が殆どがあります。だから国際航路会議協会本部もブラッセルにあっておかしくありません。協会本部のある公共事業省は中央大通りの凱旋門に向かって右手にあり、その大通りを隔てて向かい側に巨大な建物がEUの本部です。

私は打合せのため度々ブラッセルの協会本部を訪れましたが、何時も一人か二人で、しかも会議は英語とフランス語を自由自在に話すベルギー人の会長さんと事務局長さんとでしたので、非常な苦勞をしました。しかし、それを助けて下さったのが住友ゴムのブラッセル駐在の島田さんと言う方でした。当時住友ゴムは世界中のダンロップ会社を傘下に収めに、港湾の防舷材の生産を手がけていたので、この航路会議に関係があったようです。日本からブラッセルでの接待の注文を取るなど、インターネットのない時代でしたからとても出来ませんでしたので、すべて島田さんをお願いしてやってもらいました。

今もって島田さんには感謝しています。

ブラッセル郊外には中世の町の景観をそのまま残したようなブルージュやゲントなどが点在し、国際港湾アントワープあります。

またそのころは、日本特に関空からベルギー行きの直行便がなかったので、ロンドンかパリかドイツのフランクフルト経由となり、そのような不便もありました。

5、PIC 常設国際委員会への出席、（モロッコのアガディールとポーランドのシチェン）

4年に一回開催される航路会議には、その活動の基本方針を決定する常設国際委員会が置かれており、年一回開催されておりました。また常設技術委員会(PTC)、常設開発途上国協力委員会(PCDC)や国際研究委員会なども設けられています。私は1987年にモロッコのアガディールと1988年にポーランドのシチェンの委員会に参加する機会を得ました。

モロッコのアガディールはカサブランカの南西約400kmにあり、モロッコ第二の都市です。パリで住友ゴムの島田さんにお会いしたけど、その後一人でオリリー空港からカサブランカへ飛びました。カサブランカ空港はあの有名な名画「カサブランカ」の舞台となった空港なので少し期待もあったのですが、ただぼつんと白い小さな空港ビルがあっただけで些か期待はずれでがっかりしました。ここは市街地へ行けば色々な面白い名所もあったのだが、時間がなくて行けませんでした。この空港へは運輸省や大阪市からの出席者がどんどん集まっ

てきており、大阪市の港湾局企画振興部長の柳原さん(後の港湾局長)ともお会いできました。しかしここではもうフランス語しか通ぜず、乗り継ぎのアガディール行き何時出るか判らないという放送ききとれない状態でした。

アガディールの街はモロッコ第二の都市と言いながら、サハラに近いので砂漠の中の田舎町と言う感じの街で、当時は高層ビルなど全くなかった平坦な街でした。ただ大西洋に面した海岸は美しくヨーロッパの保養地として開けつつあると言う事で、6月と言うのにドイツ人などがアベックで日光浴をしている光景に出くわしました。

テクニカル・ツアーでは小さな漁港と海岸を見下ろす城砦を見学しましたが、ここでも海岸侵食はもろに大西洋に面しているために大きな問題のようでした。翌日、同伴者ツアーに同行して 100 キロほど離れたカSPAの見学に出かけましたが、中に入るとモロッコのお土産が山とあって、欧米のご婦人たちはそれらを買うは買うは、帰りのバスはそれで一杯になったのには驚かされました。

その翌年、1988年にポーランドのシチェチンで委員会が開催されました。シチェチンはドイツとポーランドの国境を流れるオダル川の河口近くにある港湾都市でオダル川はバルト海に注いでいます。第一次大戦まではドイツ領でしたがいまはポーランド領になっています。ベルリンからは 100 キロほどのところにありますので、東ドイツの人はバスでベルリンから来ていましたが、我々は当時は東ドイツを通過できませんでしたので、ワルシャワまで行って約 500 キロほどバックすることになりました。その時は会長の御巫(みかなぎ)さんのお供をするということで同じ飛行機に乗りましたが、御巫さんは後に関空社長、土木学会長を歴任されるほど優秀な方で、英語・フランス語の会話も非常にお上手で、その時も日本代表として英語・フランス語で講演されるので、機内でずうと目を通され、あの方は政府高官ですのでファーストクラスに乗っておられましたのでいちいち呼び出されて、ここの英語の表現はおかしいのと違いかとか指摘され、辞書を片手にあたふたとした記憶があります。飛行機も成田からフランクフルトに飛び、そこからルフトハンザのローカル線に乗り換えて、ワルシャワに行き、またローカル線でシチェチンに飛びました。その時は当時大阪市の港湾局建設部長だった嶋さんと同行しました。

ポーランドについては、当時まだ社会主義国で、第二次大戦中はドイツ・ナチスに支配され、戦後はソビエト・ロシアの支配下に入り、非常な苦勞をした国です。またポーランドはユダヤ人が非常に多く住んでいましたのに、殆どのユダヤ人がドイツ・ナチスによって殺害されたのは周知のことですし、ワルシャワの街はやはりドイツ・ナチスによって壊滅的に破壊されました。それもいまは完全に復旧され美しい町並みが残されていました。

ポーランドには 3 人の世界的な偉人がいると自慢しています。それはコペルニクスとショパンとキューリ婦人です。日本でそのような人を挙げるとしたら誰になるかなとその時考えました。ワルシャワの中央公園では土・日曜日などに

はショパンの名曲が生で演奏されるということでしたが、丁度その演奏も聴くことが出来ました。またポーランド人は美人が多いと言われていましたが、確かに美人も多いし、皆がこぎれいにしているのも事実でした。しかし当時まだ社会主義国でしたので物資が極端に少ないのに驚きました。商店のショウ・ウィンドーには何時も何もない状態でした。前回のモロッコの市場とは対照的でした。その社会主義国も崩壊してどうなっているのでしょうか。

シチェチンの街は先に述べましたように、オダル川の河口にある港湾都市であると同時に、造船の街でもあり、造船工場が点在していました。第 28 回国際航路会議がポーランドで開催されることになっていたのですが、この委員会がシチェチンで開かれたのですが、会議の開かれる予定のグダニクスは大阪港とは深い関係があり、姉妹港になっていますし、大阪港で開催された世界帆船まつりにもポーランドの帆船が 2 隻も参加しています。そのため嶋建設部長はこの委員会のあと、グダニクスへ表敬訪問に行かれました。

6、あとがき

まだ書きたいこと、書き残したことはたくさんあります。技術的なことには特に何も殆ど触れておりませんし、多国間にまたがる国際河川の管理の難しさから発したこの会議についても、触れることが出来ませんでした。しかし今回はこのくらいにして次回機会があれば書くことにします。

私は最後の会議当日まで勤め上げることができず、定年退官しましたことは誠に遺憾であると思っており、深くお詫び申し上げます。在任中お世話になった方々、お付き合い願った方々には厚く御礼を申し上げます。私はここでまたとない人生経験と多くの人と出会い、知識を得ましたことをうれしく思っております。

特に会長だった御巫(みかなぎ)清泰さん、日本国内委員会会長だった大久保喜市さん、元大阪市助役だった佐々木伸さん、住友ゴムの島田三郎さん、事務局員だった方々、関係された運輸省港湾局の方々、大阪市の方々、特に大阪市港湾局の方々にお世話になったことに厚く御礼を申し上げます。

またこの小文を書くにあたって、第 27 回国際航路会議（大阪大会）報告書を参考にさせて頂いたことを申し添えます。

後日談としまして、この大阪大会に同伴者委員としまして大活躍をしました妻が、イギリス代表団の代表だった **Sir Trevor Poulton Hughes** さんと **Lady Barbara June Hughes** さん(大会唯一のイギリスの貴族の方)にお世話を非常によくしたことのご褒美に、イギリスのご自宅にご招待されました。1999 年にイギリス・ロンドン郊外の **Farnham** のご自宅を我々二人で訪問しました。これも非常に記念すべき思い出として御礼申し上げます。



写真一4 ヒューズ家の訪問

村上 正君のプロフィール

最初に村上君の略歴を書かせて頂きます。

「京都生まれの京都市育ち。昭和 31 年京都大学土木工学科卒業。昭和 33 年同学、大学院修士課程を修了。大学では海岸工学を専攻して、当時問題となっていた海岸侵食を研究。そのため大阪市港湾局に要請されて入局。昭和 35 年、アメリカ留学。最初は「開水路の理論(Open Channel Flow)を書かれたヴェン・テ・チャウ博士の居られるイリノイ大学に留学。二年目はやはり港湾の勉強をしなければならないとのことで、波の予報理論の第一人者であるノイマン、ジェイムス、ピアソンの三人の先生の居られるニューヨーク大学に変わり、そこでのちに神戸商船大学の学長になられた井上篤次郎先生などと知り合う。帰国後、港湾計画などに携わった後、昭和 41 年に総合計画局にかわり、都市計画にも係わる。そこでは第一次の大阪市総合計画マスタープランの策定、大阪市の土地利用計画の改訂、容積制の指定、再開発事業、土地区画整理事業の企画、立案、実施に従事、その間、母校の非常勤講師も勤める。最後に港湾局に戻って、国際航路会議組織委員会事務局長を務めた。大阪市退職後は建設コンサルタントなどに勤める。」

この略歴が示しますように、大学同級生のホープ的存在で、卒業当時から幅広く活躍され、その上語学の堪能な才媛を伴侶に得て、益々世界に羽撃いた友人であります。

京都大学土木工学科同期生 上山堅義